

研究課題

社会形成能力を育む

教育活動の推進と校長の在り方



I 趣 旨

日本の社会は、少子高齢化や核家族化の進行、絶え間ない技術革新の中で、人間関係の希薄化の傾向の進向が強まり、周囲の人々と交流することに消極的な家庭が増え、地域活動が低迷したり、地域の中で社会性を向上したりすることが難しくなっている。

このような情勢の中、学校においては、子どもたちにしなやかな知性と創造性、豊かな人間性を育むとともに、他者と協力して社会の様々な活動に参画し、社会形成能力の基礎を身に付けることが求められている。さらには、開かれた学校としての観点から、地域コミュニティの核となる学校づくりや地域の特色を生かした豊かな体験活動を積極的に取り入れていくことが大切である。

こうした状況から、全教育活動をキャリア教育の視点からとらえ、学力・コミュニケーション能力・規範意識など、社会的・職業的自立に必要な基盤となる資質・能力を高めていく教育課程を編成し、働く意義や目的を探究し、自分なりの勤労観・職業観を形成していく指導が重要である。

本分科会では、校長のリーダーシップの下、子どもたちがより良い社会の形成に向け、主体性をもって社会に参画し、課題を解決する力や態度を養うための具体的方策と、校長の在り方を明らかにする。

II 研究発表および討議

1 研究発表

ふるさとを愛し、志を持って、
新しい社会を切り拓く力を育むキャリア教育の推進
～地域社会に貢献しようとする意欲や態度を育てる
教育活動の推進と校長の在り方～
宗谷地区 幌延町立幌延小学校 吉 崎 健 一
枝幸町立枝幸小学校 桜 井 和 則

2 研究の概要

(1) 宗谷の特色

- ① 総人口の減少
 - ② 漁業経営体数の変化
 - ③ 農業経営体数の変化
 - ④ 児童生徒数の減少
 - ⑤ 児童生徒の基本的な生活習慣と学習習慣の実態
- (2) キャリア教育推進を担う市町村校長会の取組
- ① 我が町の児童生徒の現状を分析し、改善策を打ち出す市町村校長会の動きを創る。
 - ・設定項目の数値を通して子どもたちの成長を確かめ合う。
 - ・管内市町村ごとに実態把握や分析をし、計画⇒実施⇒評価⇒改善のサイクルを確立する。
 - ・校長には授業力向上のための指導助言強化と、「ふるさとキャリア教育」を充実させ、街づくりの担い手として夢と希望をもつことができる教育の推進が求められる。
 - ② 各市町村教育委員会の取組と改善策の効果について組織的に学び合い、教訓を広げる。
 - ・校長は、ふるさとキャリア教育の有用性を教職員で共有し、連携窓口の明確化と改善点の引継ぎを指示する。
 - ・評価項目で有用性を共有する。
 - ・組織的にPDCAサイクルを回すことにより、教員個人の負担を軽減する。
 - ・幌延町校長会では、小中連携でふるさとキャリア教育による子どもたちの成長を確かめ合い、取組の有用性について学校だよりや町広報を通じて、保護者・地域に還流することにより、主体的に社会に参画しようとする力が育成された。
- (3) 地域の課題解決に向けて地域とつながる校長の役割
- ① 校種間連携や地域の教育力を生かすために校長が果たすべき役割を明らかにする。
 - ・校長は、地域の実態を丁寧に分析し、地域の課題と特色を生かした体験的な教育活動を積極的に取り入れ、社会に貢献しようとする態度を育てるために地域連携の先頭に立つ。
 - ・ふるさとキャリア教育には「福祉」と連携した教育

課程が有効である。

- ② 稚内市校長会では、子どもたちが将来への夢や目標確立し、希望をもって社会の一員として成長できるように、地域連携・小中高の学校間連携の先頭に立ち、地域の課題に向き合うキャリアデザインの作成・実践を進めた。
- ・夢や希望をもって努力する生徒が増える。
- ・人の役に立つ人間になりたいと考える生徒が増える。

3 まとめ

(1) 成果

- ① 児童生徒の現状と問題解決の方向性を行政・地域企業と共有し、成長する子どもたちの姿を通してキャリア教育の有用性を教職員と共通理解できた。
- ② ふるさとを愛し、社会に貢献しようという心を育て、自己肯定感を高める取組としてふるさとキャリア教育を充実・改善することができた。
- ③ ふるさとキャリア教育で成長する子どもたちの姿を地域に発信し、校長が地域連携・学校間連携の先頭に立つことで取組の充実につなげることができた。

(2) 課題

- ① 一定期間継続していくための研究体制と関連機関への働きかけを維持すること。
- ② 校長の実態分析力とキャリア教育を経営方針に位置付けるリーダーシップが重要であり、連携から生まれた自校の教育活動にキャリア教育の価値付けを図り、指導計画に反映させること。
- ③ 推進業務を担うミドルリーダーの育成と、組織的に取り組むことで「働き方改革」を進めることと、宗谷で大切にしてきた教育理念を継承すること。

4 研究討議

(1) 討議の柱 1

「キャリア教育の視点で教育活動をとらえ、教育課程を編成していく上での校長のリーダーシップ」

- ① 取組を持続・発展させるためには、校長の意図的な仕掛けが必要である。そのために、ミドルリーダーの育成も重要になってくるが、宗谷のような地区ではミドルリーダーの他管流出があり、管理職育成も含め、人材育成の組織的対応が必要である。
- ② 教職員への意識付け、地域の教育課題を明確にしたキャリア教育、活動のねらいの焦点化、教育課程への位置付け等への課題に対し、「こうやってやろう!」といって率先していくことが校長に求められている。
- ③ 社会形成のためには、子どもが自立していかなければならない。そのための計画の整備、職員の共通

理解を図るためには、校長として情報を発信し方向を示す必要がある。また地域との連携を図る上で、CSコーディネーターの配置にも、積極的に関わる必要がある。

- ④ 外部講師の招へいも積極的に行われているが、地域人材の高齢化も問題となっている。キャリア教育を成功させるためには、連携により子どもたちにつけさせたい力を共有し、そのためにこの活動を行うという明確なゴールを設定することが重要である。

(2) 討議の柱 2

「社会形成能力を育む教育活動の推進における、地域との連携を図る校長の役割」

- ① ノーマライゼーションの取組実態が少ない中、宗谷地区では継続した取組がなされているのは素晴らしい。小さい学校として効果的な取組がなされている成果と思われる。そこには、福祉施設が隣接しており、昔からの連携・取組が効果をあげている。また、養護学校や高等学校がいっしょに交流することにより、広がりを見せている。
- ② 稚内では、チームで幼小中高大とシステムチックに動くことができる。また、子ども会や町内会など、伝統的に地域が子どもを育てる土壤があると、キャリア教育が進めやすい。このように、地域コミュニティの強みが、キャリアデザイン作成につながっている。人口流出、職業人減少といった厳しい現状により、地域みんなで子どもたちを育てていこうとする意識が生まれている。
- ③ 小中一貫として9年間を見通した教育活動の構築が必要だが、そのための活動が精査されていない学校が多い。学校同士のつながりも大切だが、地域同士の横のつながりも大切である。信頼関係を損なうことなく、地域との関係もスクラップ&ビルドによる取組が必要になる。そのためには、「校長自ら積極的に汗をかく!」ということが最も重要である。
- ④ これまで行ってきた「地域を活かす取組」から、「地域との協働による取組」に変えることにより、子どもの学びを変えていく必要がある。そのために、



地域との関わりを大切に、校長自ら進んで汗をかき、活動に対し、情報発信していく必要がある。そのことが次の意欲や活動につながる。

- ⑤ 校長のもっているネットワークを活用し、人材や情報を学校に呼び込む必要がある。また、地域の素材は数多くあるが、活動の形骸化が見られたり、体験活動だけで終わってしまっていたり、地域からの要望にも応えなければならなかったりする現状がある。そこで、これらの活動を「学びにつなげる」ことが校長の役割であると考え。

Ⅲ ま と め

1 まとめ

(1) 討議の柱1

- ① 校長は自校の教育活動をキャリア教育の視点で整理し、関連付けて、キャリア教育の指導計画を整備させる。
- ② 校長はキャリア教育のねらいを明確にし、教職員内で共有するとともに、地域、保護者にも伝え、協力・協働を図る。
- ③ 校長は学校での学びが社会での生き方、自己実現につながっていることを意識させることが必要。
- ④ 校長はキャリア教育を生涯教育の観点でとらえ、指導に携わる者と認識を共有し、校長会は学校間や行政、地域の実業界などとの連携を図る上でリーダーシップを発揮することが求められる。
- ⑤ キャリア教育に限らず、校長は予算、時間、人員、情報などのリソースを適正に配分、再配分していく必要がある。
そして、この討議の柱1で話されたことを一言でまとめるならば、「キャリア教育推進のカギは校長の知恵と実行力」である。

(2) 討議の柱2

- ① 校長は学校と地域、関係機関、学校と学校をつなぐ組織の中心となる。
- ② 校長は教育活動の目的、内容、方法などについて教職員、地域、保護者と共有する。
- ③ 校長は学校、保護者、地域が子育ての共同体として継続的に機能できるよう連携を図る。
- ④ 校長は学校と地域をコーディネートできる人材を発掘、育成する。適材育成。
- ⑤ 校長は開かれた教育課程と働き方改革を念頭に置きながら、地域の教育材、人材の活用を図ること。
そして、この討議の柱2で話されたことを一言でまとめるならば、「教育連携のカギは校長の指導力と

熱量」である。

2 今後の課題

- (1) 「社会に開かれた教育課程」の具現化のための目標やビジョンの共有
子どもに関わる大人たちの協力・協働をつくり出す根本は理念である。これまでの協力依頼の関係から子育ての共同体としての関係を目指していく転換期を我々は迎えている。そして、その実現には「理(理念)」だけではなく「ハート(情)」が必要である。
- (2) 「スクラップ&ビルド」で教育課程を見直す
キャリア教育に限らず、目標を念頭に目的と手段を混同することなく教育活動を見直し、整理した指導計画、教育課程の編成が必要である。
- (3) 「人材育成」の推進
キャリア教育でいえば、地域コーディネーターの配置とその人材の育成をどう進めるのかが課題
- (4) キャリア教育における「主体的・対話的で深い学び」の実現
指導要領の「一人一人のキャリア形成と自己実現」には、「学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うこと。」とある。学校ごとの特色を生かしながら具現化を図る必要がある。

「第11分科会に参加して」

稚内市立稚内港小学校 川原修子

本分科会の提言は、昨年度に続き宗谷管内研究部による三年次計画の二年目のものでした。作成した幌延町立幌延小学校の吉崎健一校長先生は、残念ながら体調を崩されたため、発表は、枝幸町立枝幸小学校 桜井和則校長に代行となりました。内容は、全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙から宗谷管内の子どもの実態を分析し、結果を校長会で共有したこと、結果をもとに進めた事例が数多く盛り込まれた提言でした。提言をもとに、課題解決に向け、地域社会に貢献しようとする意欲や態度を育てる教育活動の推進のためには、子どもたちの実態を中心に、多くの関係機関がつながりあうことの重要性が共通になり、具体的な深い部分についてもっと知りたいと、多くの質問が飛び交いました。

全道各地の校長先生たちと、「社会形成能力」を高めるために、地域と連携する具体や、「キャリア教育」について等の視点から、次代を担う子どもたちを育てるための校長の役割について、研鑽を積むことができました。本当にありがとうございました。